



あひさまハロニターキ

長くて冷たい冬が終わり、待ちに待った春がやってきました。

暖かい風は冬の間には木の葉の家の戸を凍らしていた雪を溶かし、村あたたかな光に包まれています。

くまさん家のおねえちゃんはあるかたくてぬくぬくした布団に鼻先までしっかりもぐりこんで目をつむっていました。

ほかほかの布団の中をとっても気持ちいいけれど、ぽとん、ぽとん、と雪の溶ける音がおねえちゃんの心をうずうずさせます。とうとういてもたってもいられなくなり布団を跳ね除けると、おねえちゃんは外へ飛び出しました。

なんという素晴らしいことでしょう！

お日様の光は冷たい雪をすっかり溶かし、まぶしさに目を細めるおねえちゃんをたっぷりと暖かさで包みました。

おうちのまわりはスマレやタンポポ、可愛らしい花たちが咲き乱れ、ミツバチや蝶がもうすでに慌しく蜜を求めて飛び交っています。

おねえちゃんは胸いっぱいこの素晴らしいにおいを吸い込むともう一度おうちに戻って言いました。

「ママ、パパ、起きてー！ おちびちゃんおいで！ 春が来たよー！」

おねえちゃんの叫び声にガウン姿のパパとママ、ママに抱っこされて目をこすりながらおちびちゃんが起きてきました。

三人とも目の前の光景に目を輝かせながら言いました。

「なんて素敵なの。お天道さまの光って、とっても気持ちいい！」

それから家族みんなで春の光のなかでうっとりしました。

パパの柔らかな毛皮は根元からすっかりふわふわになり干草のようないいにおいがしています。

「パパあったかい」

「そうかい？ おねえちゃんもふかふかになったなあ」

「お布団の中でくしゃくしゃだったのがお洗濯されたみたいになったよ」

「そうね。そういえばママ、お腹ぺこぺこだわ。おちびちゃんは？」

「うん。とーっても空いた！ あたち、お天道さま見ていたらあったかくてまあるくて、ほわんほわんのパンケーキが食べたくなったよ！」

「「「パンケーキ！」」」

そういったとたんみんなのお腹がいつせいにグーとなりました。

ママは笑いながらこういいました。

「みんなもお腹も大賛成ね。では美味しい美味しいパンケーキ作りましょう！」

おねえちゃんはお使いで村の何でも屋さんに向かいます。
しっかりと手をつないだおちびちゃんも一緒です。
まだ道端には雪解け後の水たまりが転々と残っていました。
おねえちゃんはえいと飛び越え、おちびちゃんはちょろちょろまわりみちをして進んでいきます

道の先に何でも屋さんの緑の三角屋根が見えました。

「「こんにちはー！」」

「いらっしゃい。くまさんちのおねえちゃんとおちびちゃん」

キツネのお兄ちゃんが屋根と同じ緑色のエプロンででてきました。

「春一番のお客さんだよ。何が欲しいんだい？」

二人は小麦粉とお砂糖を選びました。

「これで何を作るの？」

「お日様みたいなパンケーキよ」

おちびちゃんが得意げに教えました。

「へー、そいつは楽しみだね！」

お兄ちゃんは二人を見送ってくれました。

次に二人はニコニコ農園へ向かいます。犬のおじさんがたくさんの鶏たちをお庭で遊ばせていました。

「おや、くまさんちのお嬢ちゃんたち、お目覚めかい。ぼかぼか気持ちいいねえ〜」

鶏たちはコッコッコと元気に鳴きながら走り回っています。

「こんにちはおじさん。産みたての卵下さいな」

「はいはい、ちょっと待っていてね」

おじさんは大きくて真っ白な美しい卵を選んでくれました。

「割らないように気をつけてもって帰るんだよ〜」

「ありがとう、犬のおじさん！」

おねえちゃんはおじさんにおちびちゃんは鶏さんたちに、大きく手を振って分かれしました。

おうちに帰る途中お茶屋のうさぎさんちの前をとおりかかりました。

「あら、くまさんちのお嬢さんたち。こんにちは！」

「「こんにちは！」」

「良かったらちょっと寄って行って！ 今いいものを作っていたのよ。」

いいものってなんだろう、と後に着いていくと、裏庭につきました。

そこはうさぎさん自慢の植物園で、色とりどりの花たちの周りをミツバチたちがぶんぶんと忙しく飛び回っています。うさぎさんが奥から小さくて可愛らしい包みを持ってきました。

「これこれ。冬の間に乾燥させたハーブよ。私オリジナルのブレンドなの。美味しいからぜひとも飲んでみてね」

にっこり笑いながらいいました。

「「ありがとうございます！」」

二人そろってお礼をいいながら嬉しいお土産ににこにこして家路につきました。

玄関先にはママと牛乳配達員の牛さんがいました。

「二人ともお帰りなさい。お使いご苦労さまでした」

「こんにちはお嬢ちゃんたち。搾りたてのミルクとバターを持ってきたよ。美味しいもの作るんだって？楽しみだね」

「そうなの。おひさまみたいなパンケーキよ！」

おちびちゃんはまたまた自慢げに教えてあげました。

みんなで牛さんを見送ると、おもむろにママが張り切った声を出しました。

「さて、材料揃ったことだし、始めましょう。二人とも手を洗ってきてね」

「「はい！」」

ママは二人に白くてヒラヒラのついたエプロンを用意してくれていました。お姉ちゃんはおちびちゃんの背中にしっかりリボンを結んであげます。

「それじゃあはじめましょう。まずは小麦粉を量るのよ」

はかりの上に大きな銀のボウルをのせ、小麦粉をだしていきます。フワンとまった粉がおねえちゃんの鼻に入りました。

「は、は、はーくしょん！」

いきおいよくでたくしゃみが小麦粉を吹き飛ばしました。おねえちゃんとおちびちゃんはあっというまに真っ白な白熊姉妹になってしまいました。それを見たママは大笑い。でも、タオルで二人の毛皮を優しく拭いてくれました。

「さあ次は卵を入れましょう」

「私卵割ったことないよ」

「あたちもないよ」

「じゃあまずママがやるからよく見ているのよ」

ママは卵をひとつ手に取ると、ボウルのはじっこでコツコツと叩き素早く割ってみせました。とろりとした濃い黄色の黄身はまったくくずれることなく王様のように白身の真ん中に座っています。

おねえちゃんもおちびちゃんもママの手さばきにほうっとため息をつきました。

「私にできるかなあ」

おねえちゃんは恐る恐る卵を一つ手にとって、心もとなげにトントンとボウルにぶつけます。おちびちゃんは片手に持つとえいとまな板にぶつけました。

おねえちゃんの卵は全く割れないし、おちびちゃんの卵はぐっしゃり潰れてベトベトになってしまいました。

「大丈夫よ。練習すれば誰だって上手になるんだから」

ママはにこにこしながら二人を見守っています。

泡だて器をつかって十分材料を混ぜあわせてから特大フライパンに流し込みます。

ふたをしてしっかり焼いていきました。

しばらくすると、ふわんと良い香りがただよってきました。おねえちゃんとおちびちゃんは思わず目を見合わせてにっこりします。

「待ちきれないね、おねえちゃん！」

「うん、すっごくいいにおい。早く食べたーい！」

「二人とも、そろそろいいかもね。」

ママが特大大皿を持ってきました。

「これにのっけるわよ。いくわよー！」

さっとふたをとるとうっとりするようないい香りが部屋中に溢れます。

「それ！」

ママがブンとフライパンをふると、あつあつのパンケーキがピヨーンと飛び出してきて宙返りしました。大皿に大きな大きなパンケーキが乗せられると、おねえちゃんとおちびちゃんはそろって一気に匂いを吸い込みます！

「すーはーすーはー」

そのときパパが帰ってきました。

「ただいま、いいもの持って来たぞ。お、ちょうどパンケーキできたところか！」

ママが厚切りのバターをケーキに乗せます。バターはみるみるうちに溶けていきます。

「そこで、こいつだ」

パパが取り出したのは家族みんな大好きな、くまさん印のはちみつシロップでした。

「とれたてのはちみつだよ。ミツバチさんたちが頑張ってくれたんだ。これをたっぷりた〜っぷりかけて……」

とろとろと黄金色に輝く蜜ができたてほやほやのパンケーキかかっています。

ママはうさぎさんちでもらったハーブティーを淹れてくれました。さらなるいいかおりが家族みんなのお腹を刺激します。

パパは思わず舌なめずりしていました。

「さあ、できたわね。みんなで食べましょう！」

「「「いっただっきまーす！」」」

でっかいお皿にパパ、中くらいのお皿にママ、ちっちゃいお皿におねえちゃん、それよりさらにちっちゃいお皿におちびちゃん。

それぞれできたてのケーキをのせてパクっと一口食べました！ 甘くて優しいまるでお日様みた

いな味がみるみると口中に広がっていきます。

「「「おいしーい！！！」」」

家族みんなの楽しい笑い声が、いつまでもいつまでも続いていましたとさ。